

Q29 特殊学級、通級指導教室担任との連携に関して

〈このような状態は自閉症の特性からきています。〉

Aさんは、授業終了の時刻が近づくとそわそわし始め、その時刻になると状況に関係なく「終わりです」と大きな声で言い、学習用具をかたづけて交流している特殊学級に行こうとします。また、日課の変更がある場合は大騒ぎになってしまいます。「時間は守らなければいけない」「～の次は～をしなければいけない」などの時間へのこだわりの背景としては、「予定通りに進まない、～ができなくなってしまう」という本人なりの理由や不安があると考えられます。

このように、自閉症の子どもには、自分を守るためのさまざまなこだわりがあります。子どもに合った手がかりを与えながら、活動に見通しを持たせ、少しずつ自己コントロールできるようにするための具体的な支援等は、通級指導教室等の担任と連携を取りながら行うことが大切です。

〈このような場合の支援 1〉

小学校5年生の知的障害を伴う自閉症の男児。基本的な生活習慣は身につけていますが、動作がゆっくりで、活動は友だちから遅れがちです。教室では他の子どもと同じ学習は難しく、情緒障害特殊学級でも学習をしています。このような場合、特殊学級との連携に関しては、以下のような留意点が考えられます。

- ① 特殊学級在籍の子どもでも、通常の学級の一員として受け入れる。
- ② 年度当初、学期毎、週毎というように時間を作って、特殊学級担任と、子どもの状態や特性、家庭の様子などの情報交換を行い、それぞれの場での基本的な指導の役割を明確にする。
- ③ 通常の学級での支援目標や具体的な手立てを明確にしておく。
- ④ 学級の子どもの発達段階に応じて、特殊学級担任から、その子どもが特殊学級で学ぶ理由や、その子どもへの関わり方などをわかりやすく話してもらうことで、理解につながる。
- ⑤ 互いの学級での様子を参観したり、情報交換をしたりする中で、より具体的な指導や支援内容の手立てを具体化する。
- ⑥ 特殊学級担任や通級指導教室担任が、可能なら通常の学級での支援にTTの形で入るなど、指導や支援形態の工夫をする。

〈このような場合の支援 2〉

小学1年生の高機能自閉症の男児。算数や国語、体育など得意な学習は頑張るのですが、苦手な生活科や図工になるとなかなかやろうとしません。朝の会や帰りの会でも状況を考えずに発言して、友だちに注意されることもあります。このような場合、特殊学級や通級指導教室と連携しながら支援していく方法としては、以下のようなことが考えられます。

- ⑦ 特殊学級や通級指導教室の担任から、高機能自閉症の子どもの特性や支援の仕内容・仕方について、具体的なアドバイスをもらう。
- ⑧ 可能なら、学校全体の職員に対して、高機能自閉症等についての理解と対応に関する研修を実施する。
- ⑨ 特殊学級や通級指導教室でできるようになったことを通常の学級で生かすようにする。せるよう、具体的な情報交換を密にする。
- ⑩ 特に家庭への連絡に関しては情報交換を密に行い、学校として同一歩調で働きかけをしていく。

学級担任の記録(メモ)

<項目の利用回数>



月／日	対象児の問題	教師やクラスの子どもの対応	対応後の対象児の様子